

## 老年の価値

### Der Wert des Alters

松 田 幸 子  
Matsuda Sachiko

#### 要 旨

ヘルマン・ヘッセの青春時代は、詩人になるか、さもなければ何ものにもなりたくないという彼の希望と周囲の人の無理解との闘いであった。第一次世界大戦中は、自分の反戦思想と社会との闘いであった。そのような時代を経て彼はようやくおだやかな老年を迎えることができたのである。それは人生の大事な事柄以外は、ユーモアの精神をもって生きることであるということであった。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは生命力に満ちあふれ、人生を力強く生きた女性であったが、彼女に苦悩が現れはじめたのは、アルジェリア戦争（フランスの植民地であったアルジェリアは1962年に独立したが、そのために起こした戦争）の状況と、自分が老年になったという現実であった。彼女にとって老いは自然が与える不当な暴行のようなものであるが、人は他の人と関わりを持ち、社会的に生きることによって老年になっても生きる意味があると彼女は言うのである。

ヘッセは個人的な老いの価値を考え、ボーヴォワールは人間の老いの問題を社会的に考えている。

キーワード    ヘルマン・ヘッセ    シモーヌ・ド・ボーヴォワール    老年の価値  
                 忍耐    ユーモア    段階    第一次世界大戦    習慣

#### は じ め に

ドイツの詩人で作家でもあるヘルマン・ヘッセ（Hermann Hesse, 1877～1962）は彼の作品や彼が書いた3,500通の手紙のなかで、人が老いることで手に入れられるものと、失うもの

について述べている。ヘッセ研究の権威者であるドイツのヴォルカー・ミヒェルス（Volker Michels, 1943～）は、ヘッセの作品や手紙のなかから選んでヘッセの死後、ヘッセ著『老年の価値』という本を編集出版している。この論文の第1章ではこの本を参考にしながら、ヘッセが老年の価値をどのように考えたかを考察する。第2章では、ヘッセが老年に達するまでの苦悩の日々をたどってみる。そして第3章ではフランスの作家シモーヌ・ド・ボーヴォワール（Simone de Beauvoir, 1908～1986）が彼女の作品『老い』のなかで、老いの価値をどのように考えているかを考察する。最後に、老いの価値について二人の考え方の相違点はどこからくるのかということ考察したい。

## 第1章 ヘッセの考える老年の価値

ヘッセが老年の価値というとき、彼は 何歳から老年と考えているのであろうか。これを考えることからこの論文を始めたい。

「50 歳になると、人はそろそろある種の子供っぽい愚行をしたり、名声や信用を得ようとしたりすることを止める。そして自分の人生を冷静に回顧しはじめる。」

（1945 年 8 月 18 日、妻ニノンの 50 歳の誕生日のための覚書）

またヘッセは次のようにも述べている。

「40 歳から 50 歳までの 10 年間は・・・不満が生じてくる時期だ。しかしそれから落ち着いた時期がやってくる。青春時代が美しいと同じように、老いること、成熟すること、この美しさと幸せをもっているのだ。」

（1955 年、息子ブルーノー宛の手紙）

さらに次のような文章も見える。

「50 歳と 80 歳のあいだに私たちはたくさんのすばらしいこと、それ以前の何 10 年間に体験したのとほとんど同じくらいたくさんのことを体験できます。」

（1961 年 4 月、グンター・ペーマー宛の手紙）

これらの文章を読むと、ヘッセは 50 歳くらいからを老年と考えているようにみえる。では 50 歳から 80 歳までの間に経験できるすばらしいこととは何であろうか。私は彼の作品のなかにその答えを見つけようと思う。

ヘッセが 50 歳のときに書いた作品『荒野のおおかみ』はヘッセ自身の自己告白であり、ま

た主人公のハリー・ハラーはヘッセ自身の自画像であるともいわれている。

『荒野のおおかみ』のあらすじは次のようなものである。

主人公のハリー・ハラーは客観的に物事を見ることができる人であり、豊かな知識を持った思索の人であったが、自分自身の生活には満足していなかった。彼は市民的世界に住み続けながら、しかも人間的性質以外におおかみの性質をもっていたので、人間の世界で生きている自分は孤立した人間であると感じていたのである。そのハリー・ハラーが自己嫌悪のあまりある時自殺を決意するのであるが、そのきっかけは一つの事件が原因であった。

それは知人の大学教授の夕食に招待されたときのことであった。ハリー・ハラーはその家に飾られているゲーテの肖像画が気に入らなかった。その画は彼が尊敬するゲーテとは似ても似つかないほど内面性のかけらも見えないようなものであった。さらに食事の時の話題も気に入らなかった。某政党の機関紙に一人のジャーナリストが書いた反戦思想の論文を教授が見て、彼はそのジャーナリストを祖国にたいする裏切り者だと非難したのである。ハリー・ハラーは最初のうちは適当に調子をあわせていたが、次第におおかみの性質が出てきて腹立たしくなり、その文章を書いたジャーナリストは自分であることを教授に告げた。そして自分の反戦思想をあらためて述べ「それではご免こうむる」と言って退出してしまった。

おおかみの性質が出てしまったのであるが、その後でハリー・ハラーは自分のとった行動に嫌気がさし自殺を考えるようになったのである。そして夜中まで街をさ迷い歩いたハリー・ハラーは、自殺の誘惑から逃れるように駆け込んだ酒場で若くて美しい娼婦ヘルミーネと出あった。

彼女はハリー・ハラーに悩みから逃れるためにダンスをならうことを勧め、ダンスの相手として女友達を紹介した。さらにヘルミーネはハリー・ハラーに、人間は精神的なものと感覚的なものとのバランスをとって生きていくべきだと教えた。それはおおかみの性質を切り捨てないで、市民的性質とともに生きることであった。

さらにヘルミーネは友人のパブロを紹介したのであるが、彼は現実の世界のなかで真実の国を見つけるには、ユーモアが必要であるとハリー・ハラーに教えた。それは大事なこと以外はユーモアで受け流せばよいということであった。

ここでいうユーモアとは、対象を否定しつつもその対象を肯定するものであるが、このように一定の距離をもって現実の世界を眺めることのできる人だけが、理想の国を見つけることができるのである。これはまたヘッセ自身の考えでもあった。

これが『荒野のおおかみ』のあらすじであるが、ハリー・ハラーはヘッセ自身ではないにしても、この作品のなかでハリー・ハラーに語らせていることは、ヘッセが老年になって静かな生活を得るまでの内面的な葛藤や、自殺を考えたこと、そして第一次世界大戦中の思想にたいする彼の批判的態度である。そして真剣に考えなければならないこと以外は、ユーモアの精神をもって生きることが大切であるとヘッセは言っている。

『老いの価値』のなかでヘッセは、老年になると人は若い頃のいらいらや、緊張感、あるものに期待したり、また裏切られて幻滅を感じたりすることがなくなり、ユーモアをもって穏やかに生活を送ることが価値あることであると述べている。

さらにヘッセは、若い人が老人のぎごちない歩き方や白髪、皺だらけの首を見て滑稽だと笑っても、それをユーモアの心をもって気にしないことができるのも、老人の価値であるとも言っている。

ヘッセはユーモアという言葉をつぎつぎ使っているが、ユーモアというものにたいするヘッセの考えは次の言葉のなかにあると思われる。

「人びとにはユーモアが、ほほ笑みが、深刻に考えないことが、世界を一つの絵にかえることが、ものごとをまるで、はかない夕雲であるように眺めることがはるかにずーとふさわしい。」

(1926 年、エッセイ『夕べの雲』)

ここには詩人ヘッセが老年になってたどりついたおだやかな心境がでてるように思われる。ヘッセは、老年になると人は多くの苦痛に見まわれることもあるが、忍耐、平静心や叡知、そしてユーモアをもって生きるべきだというのである。

またヘッセは「段階」という言葉も多用している。

「過ぎ去ったことにこだわったり、それを模倣したりすることが私たちにとって重要なのではなく、変化に対応できる態度をもって新しいことを体験し、力を尽くしてそれに参加することが必要でしょう。」

(1916 年、姉アデーレ宛の手紙)

「私の人生は、現在を超越することである。一段一段と前進することでなければならないと、そんなふうに考えていた。……けっして倦まず、決して眠らず、つねに醒めて、つねに完全に沈着に、人生段階をひとつづつ通りすぎ、前進していくべきであると。……」

(1943 年『ガラス玉遊戯』)

以上のようにヘッセは、老年になって死を恐れぬおだやかな心境になったことを、そしてそれがまた老年の価値であると述べるのである。このような心境に到達するまでに人は何をすべきか、ということについてヘッセは具体的に何も語っていない。そこで第2章では、50歳以前のヘッセの人生を簡単に辿ってみることにする。

## 第2章 ヘッセの苦悩の時代

ヘッセがこのような静かな心境に到達するまでには、多くの苦悩の時代があった。彼は13歳の時から「詩人になるか、さもなければ何ものにもなりたくない」とはっきり言っていた。ヘッセは14歳で難関の名門校マウルブロン神学校に優秀な成績で合格したが、この学校の詰め込み主義の教育や、生徒の気持ちも考えずに一方的に教えこむ教師たちが嫌になり、15歳のときに彼は寄宿舎を脱走してしまった。そして夜通し歩きつづけたが翌日発見されて神学校に連れもどされた。この時のことを彼は手紙で父親に報告している。

「僕は23時間、ヴェルテンブルク、バーデン、ヘッセンを歩き回りました。夜の8時から朝の4時まで零下7度の下で野宿したのを除いて、ずっと歩いていました。」

(1892年3月9日、脱走後、父に宛てた最初の手紙)

その後ヘッセは年上の女性に恋をして拒絶されると、彼は自殺未遂事件を起こして精神病院に入れられた。そして神学校を退学させられたヘッセは、さまざまな職業を転々として、19歳のときにようやく本屋の店員になることができた。ヘッセは仕事のかたわら、詩人になるための準備として両親や友人などに手紙を書いたり、世界文学全集の多くを読んだりした。このようにしているうちにだんだんと詩や文学の傑作がかけられるようになった。そして26歳のときに書いた作品『ペーター・カーメンツィント』が翌年(1904年)出版され、ヘッセはようやく世に認められるようになった。そして結婚をし子供にも恵まれた。

1912年に彼は妻子を連れてスイスに移住した。その後1914年には第一次世界大戦が勃発したが、ヘッセは病弱のために兵役につけず、スイスにあるドイツ領事館に申し出て捕虜になったドイツ兵のために働いた。その頃ヘッセはスイスの新聞に戦争に反対する内容の論文を書いたことがあるが、これにたいしてドイツ国内では「スイスに逃れている者が何を言うか」という非難の声があがった。これにたいしてヘッセを弁護し激励したのが、第二次世界大戦後に西ドイツ大統領になったテオドール・ホイスと、フランスの作家ロマン・ロランであった。(ロマン・ロランは1915年に、ヘルマン・ヘッセは1946年にそれぞれノーベル文学賞を受賞している。)

これがヘッセの社会的にみた苦悩の時代であるが、また彼は私生活の面でもあまり恵まれなかったようである。ヘッセは3回結婚しているが、最初の妻とのあいだには3人の男の子に恵まれながら、妻の精神病のため1923年に離婚、第2の妻とは3年の結婚生活の後に妻の希望で結婚を解消した。そしてその後、54歳のときに3回目の結婚をしてヘッセはようやく落ち着いた家庭生活を営むことができるようになった。

以上のような苦しい生活を経験したので、ヘッセは「人は人生で真剣に考えなければならないこと以外は、ユーモアの精神をもって生きることが大切である」と言うことができたのであると思われる。

### 第3章 ボーヴォワール著『老い』のなかに見る老年の価値

人間にとって「老い」とはどのようなものであるかをボーヴォワールは次のように述べている。

「年月を経るにつけ、われわれの過去は、重くなり、われわれの未来は、短くなる。」

したがって老人とは、

「自分の背後に長い人生をもち、その前方にはきわめて限られた存続の希望しかもないものである。」

また彼女は次のようにも言っている。

「限られた未来、凝結した過去、これが年取った人びとの直面する状況なのである。」

人は凝結した過去を背後にもつわけであるが、その過去は当人の経験によって異なるものである。また時間というものは一般的にいうならば、すべての人にとって同じように流れていくものであるが、それを感じる人間の立場からは、人生のさまざまな時期において同じようには流れないのである。たとえば人は年をとるにつれて時間は速く進むように感じられ、未来が長い子供には、時間の流れは長いように感じられるのである。子供が時間の経過を長く感じるというのは、いいかえれば、新しい経験が次々に起り、意識のなかに深く刻みこまれるので長く感じるのである。

「来年」ということを考える場合、子供と大人とでは大きく異なるのである。子供にはこれから起るであろうと思われる未知数のものが考えられるのにたいし、大人は「来年」もまた今までと同様のことが起る出であろうと予想されるからである。

このように考えるとき、限られた未来、凝結した過去、それが年老いた人の直面する状況なのである。多くの場合、この状況は彼らの活動を無力化するものである。

以上のことを理解したうえで、ボーヴォワールは各分野の人々の生き方を考えている。それを次に紹介する。

医者の場合、年齢は経験をもたらすと考えられる。背後に長い職歴をもつほうが一般に青二才よりは患者に信用されるものである。しかし、ある時からその立場が逆転することがある。肉体的に衰え、医者として新しい医学についていけず時代遅れの医者とみなされると、患者は彼から離れていく。

肉体的な能力が大きく要求される職業では、生物学的退化は決定的な影響を受ける。たとえばスポーツ選手の場合や舞踏家、歌手などは体力が衰えればただちに第一線を退かねばならない。ただし俳優やピアニスト、ヴァイオリニストなどは健康に恵まれ、練習を怠らなければ、80歳を過ぎても才能と名声を保つこともある。

科学者の場合は、例外はもちろんあるが、老年期に独創的な発見をするのはきわめて稀である。化学における重要な発見は30歳から35歳の人によってなされることが多い。また物理学では30歳から34歳ぐらい、天文学では40歳から44歳、数学では年とってから発見は非常に稀であるが、25歳から30歳ぐらいの人によってなされた発見が多い。

この分野では若いうちになされる発見が多く、現在ではめまぐるしく進歩し、その変化には老科学者はついていけないことがある。たとえば若い科学者の議論は理解できず、理解するためには新しい用語から学びなおさなければならず、それには時間がかかりすぎるので尻込みすることもある。

作家たちの場合は、ゲーテ、ボオルテール、ユーゴーなどは例外だが、一般的に年をとってからは創作にむいていない。多くの作家が老人になっても書くのは、書くことが習慣になっているからであり、生活のためであり、また自分が書けなくなったことを認めたくないからである。それでも書き続けるが、晩年の作品は若い頃の作品と比較すると圧倒的に劣っている。書くためには激しい情熱をもつ必要があり、その情熱を長いこと維持しなければならないが、肉体的に衰えた老年期にはその活力がなくなるからである。

「若いときには対象がなくても書きたい気持ちさえあれば、あらゆることについて言うべきことがあると思ひこむのに充分なのだが、年をとると自分は巻紙の終りに来ているのではないか、何か書けば以前に言ったことの繰り返しになるのではないかと恐れる。」

【説明】ゲーテ（1749～1832）は彼の最も美しい詩を晩年に書き、またこの時期に『詩と真実』や『ファスト』の第二部も完成させている。

ボオルテール（1694～1778）は彼の作品のなかの最良のものを、彼の生涯の最後の20年間に書いた。

ユーゴー（1802～1885）は64歳を過ぎても重要な作品を執筆した。

哲学者の場合は科学者の場合とは異なり、その思想は年令とともに豊かになる。プラトンは62歳を過ぎてから書いたものが、ソクラテスの影響を脱して彼独特の哲学となっている。『クリトン』、『ヒレボス』などは内容がすぐれている。なお『ヒレボス』はプラトンの74歳ごろの著作である。

カントは57歳で『純粹理性批判』、64歳で『実践理性批判』、66歳で『判断力批判』を出版している。また『単なる理性の限界内における宗教』はさらに年をとってからのものであった。

これまで見てきたように領域によって例外はあるものの、一般的に言えば老いはいろいろな能力を減退させ、情熱を衰えさせるとボーヴォワールは言っている。

#### 第4章 ボーヴォワールの言う老いの価値

ボーヴォワールは彼女の著書のなかで、時代のなかに流民のように取り残された老人の日常生活を述べている。たとえば空虚な名誉欲を追う人や、自分の作った習慣を固執する理由や、自分の所有物に囲まれて自己満足する姿などを次のような言葉で表現している。

「老人は自己のイメージを失ったので、それを自己の外側に再び見いだそうとつとめる。勲章、名誉ある地位、称号、アカデミー会員の肩書きなどを欲しがる。」

「習慣は老人にたいして存在論的安泰をもたらす。・・・習慣は明日は今日をくりかえすであろうということを彼に保障することによって、彼をその漠然とした不安から守ってくれる。」

「私の所有物の全体は私の存在の全体を反映する。」

老人は変化を恐れる。そこで自分の作った習慣にしたがうことで変化の不安をなくそうとするのである。それは習慣を守れなくなったときは、やがて死が迫ってくると考えるからである。自分の所有物にたいしてもそれと同じであって、これまで使っていたもの、たとえばレストランなどで自分が何時も座っている椅子に、先に誰かが座っていると、自分の居場所がなくなったかのように感じるのである。

このような考えはある意味で滑稽なことであるが、それをなくするためには人は老人になっても生きる意義を追求すべきであると、ボーヴォワールは次のように述べている。

「生きる意義を追求するには、個人、公共福祉などへの献身でもよいし、社会的あるいは政治的な仕事、知的創造的な仕事でもよい。・・・われわれは老いても強い情熱をもち続けるべきである。」

彼女は、強い情熱を他の人々に向け、他の人々のために献身することによって老人は人生の価値を持続けることができると考えている。つねに積極的に生きようとしていた彼女は、老



いても人生を受け身に生きるべきではなく、人間として毅然と生き続けるべきであると主張するのである。さらに彼女は次のようにも言う。

「人はよく老年を準備せよと忠告する。しかしもしそれがただ金を貯蓄し、隠居所を選定し、趣味をつくっておくというようなことだけであるならば、いざその時期になったときに大して役には立たないだろう。」

このように老人が積極的に生きられるようにめには、社会は年金の増額や住みやすい住居を提供するだけではなく、もっと根本的な対策を講じる必要があると、すなわち体制全体を変えなければならないとボーヴォワールは提言している。彼女は社会主義社会は資本主義社会よりましなものであるが、老人が一人の人間として生き得るための理想的な社会ではないと結論づけている。

## お わ り に

老年の価値ある生き方について、ヘッセとボーヴォワールの考えを紹介してきた。

ヘッセは個人的な生き方について、ボーヴォワールは社会的政策の面から述べていることがわかる。二人の生きた国は異なっているが時代的には多く重なっている。またその思想的な考えは全く違うが、老人にも価値ある生き方があるという点では共通したものを持っている。

ヘッセは老人が幸せに生きるには、「人生で真剣に考えなければならないこと以外は、ユーモアの精神を持って生きることが大切である」というように、個人の生き方を確立する方向に求めている。それにたいしボーヴォワールは、老人が幸せに生きるためには社会の体制全体を変えなければならないと言うのである。そして資本主義社会より社会主義社会のほうがまだましなものがあると言っているが、1986年に死んだ彼女は、1989年のベルリンの壁崩壊によって社会主義国家が消え始めたことを知らなかったから、このように考えたのも当然であろう。それはともかく、二人とも老人にも生きる価値を認めていた点では同じである。

## 文 献

- 1) Hermann Hesse, Vom Wert des Alters mit Fotografien des Dichters  
von Martin Hesse, Frankfurt am Main, 2007.
- 2) ヘルマン・ヘッセ著、『老年の価値』、岡田朝雄訳、朝日出版、2008。
- 3) シモーヌ・ド・ボーヴォワール著、『老い』、朝吹三吉訳、人文書院、1982。
- 4) ラルフ・フリードマン著、『評伝ヘルマン・ヘッセ』、藤川芳朗訳、草思社、2004。
- 5) 松田幸子、「内面への道の探求者・ヘッセ・・・荒野のおおかみをめぐって」上田女子短期大学紀要、  
23号、2000。
- 6) 松田幸子、「ヘッセのガラス玉遊戯について」上田女子短期大学紀要、26号、2003。